

紫
式
部
の
卷

紫式部の巻

上東門院——一條
天皇の皇后彰子

こせうしやう—
上東門院の女房
小少將

あまの戸の—新
勅撰には「いか
なる浦に」とあ
り
槇の戸の—同集
に「槇の戸も」と
あり

一條の院の御時上東門院の官女に紫式部といふ賢女あり。その姿妙にして楊柳の風に靡
き、翡翠のかんざし、蟬の羽の透きとほりたるが如し、亂れてかゝる鬢のはづれより顔
の匂ひ薄雲に月のすきたるが如し。唇は芙蓉の如し、胸は玉に似たり。姿は園生の中の
花の夕映、咲きこほれたる梅櫻の如し。心ばへ幽玄尋常にして世の常の人にすぐれたり。
管絃の道暗からず、和歌達者にして衆につらなり、既に歌仙にのれり。こゝにこせうし
やう夕月夜をかしかりける程に、水雞の鳴き侍りければ、紫式部が許へよみてつかはし
ける。

あまの戸の月の通路さゝねどもいかなる方に叩く水雞ぞ
とあれば、やがて紫式部、

槇の戸のさゝでやすらふ月影に何をあかずと叩く水雞ぞ

となんよみてやりける。此人石山の觀音を信じて、折々參詣せられけり。あるとき賀茂の齋いつきみやの宮より上東門院へめづらかなる物語や侍る、見給ひたきよし御所望ありけり。

彼の齋の宮と申すは村上天皇十の宮選子せんし内親王ないしんわうにておはします。賀茂の齋院さいいんは御門御代のはじめ殊に代らせ給ふ事なれども、この齋院は圓融院の御時天祿二年に齋の宮に備はり給ひて、既に御門三代に及びしかども、齋いつきはあひかはり給はず、是によつて大齋院だいさいいんとは申すなり。上東門院、紫式部を御前おんまへに召して、うつほ、竹取などのふるめかしき物語は、定めて目馴れ給ふべければ、新しく作りて奉れと仰せければ、式部仰せに従ひ奉りて、まづ石山寺にまうでつゝ、夜もすがら大悲みだの御名を唱へて、此事をぞ祈りける。をりしも八月十五夜の事なるに、月の影湖水にうつりて、心の澄み渡るまゝに、物語の風情心に浮みければ、まづ須磨明石りやうくわんの兩卷を書きそめしが、そのおもむきを忘れぬさきにとて、佛前にありける大般若の料紙を本尊ほんそんに申しうけて、ひるがへして書きとめけり。この故に罪障懺悔のために、大般若一部六百卷を自筆にかきて佛前に納め奉る、今に當寺の寶藏に納めおき侍るとぞ。次第に書き加へて五十四帖の草子となし、光源氏の物語と名付け、則ち大齋院へまゐらせ給ふ。齋院なのめならず悦びさうせらる。およそ物語の最上

大悲—觀音をいふ

さうせらる—藏せらる又は奏せらるか

せぞくゆふゑん
―せぞくは世
俗、ゆふゑんは
優艶又は幽遠か

ためあきら―篇
顯

有無の二偏云々
―有無二偏の差
別觀を脱却した
るものを中道と
いふこの中道即
ち宇宙人生の實
相なり

貴賤男女のもてあそび、天下の至寶とぞなりにける。さて此物語は天台の六十卷といふ書しよを學んで、五十四帖に卷まきを分ち、筆法は史記といふ書をかたどれり。日本紀にほんぎを考へ書きつゞけたる故に、紫式部が異名を日本紀の御局おつぼねとぞ申しける。總じて卷々まきまきにせぞくゆふゑんの詞多しといへども、皆これ敷島大和言葉なり。歌は詞すくなうして心深く、多くの義理を含めり、則ちこれ眞言の陀羅尼をうつしたり、大日の三十一品ほんを表して三十一字の詠とす。滅罪生善の徳あり、このゆゑに神明佛陀歌には感應をなし給へり。又紫式部は越前の守ためあきらためあきらの娘、一條の院の御めのと子なり。敷島の道にすぐれたるのみにもあらず、佛道にもおもむきて天台宗の許可をかうぶるといへり。さてこそ此物語にもまづ好色の事どもを書きあらはすといへども、人を仁義の道に引入れ、又は菩提心を勧めて、終には中道實相の妙理を悟らしめて、出世の善根を成就すべしとの方便なり。

さる程に卷まきのはじめに箒木はきぎ、卷の終に夢の浮橋うきはしと立てたること、有無うむの二偏を離れて、中道實相ちゅうだうじつさうの理こころわりをあらはしたる物なり。そのゆゑ又諸法は無きかと思へばしかもあり、又有るかと思へば無きものなり。有るにもあらず、無きにもあらず、有無の二法を離れて

實相の道に入るべき故に、簾木といふ卷の名を始めにおけり、其證歌に云く、

園原やふせやに生ふる簾木のありとは見えて逢はぬ君かな

信濃の國園原といふ所あり、その所に簾木といふ物あり、遠くより見れば、簾を立てたるやうに見ゆるを、近くへよりて見れば、それに似たる木もなし。かるが故に有りと見れども無きものに、譬へ侍るなり。又夢の浮橋といふこと、是もありてなきものの譬なり。經に云、生死涅槃猶如昨夢と。又莊子といふ書に云、莊周が夢中に胡蝶となつてもこそ百年の間花にたはぶれ遊ぶと見たる由を書けり。此心を歌に、

百年は花に宿りてすぐしにきあはれ胡蝶の夢にぞありける

百年は云々堀河百首、大江匡房の歌

此物語にかきあらはす所の人々、有爲轉變のことわりを知らしめ、菩提の道に勧め入れんがために終に夢の浮橋ととどめたり。これ則ち觀音の式部が心に入り替りて作らせ給ふと思へば、有難かりし御事なり。又人皇八十代の御門高倉の院の御時に、安居院の法印澄憲といふ人ありけり。これは少納言通憲入道信西が末子、文才世にすぐれ、辯舌人に越えたり。承安四年の春の比、天下大きに旱して人民悲み歎きしかば、則ち禁中において最勝講を行はれ、雨乞の祕法修せられけり。第二日の導師はこの澄憲僧都にて侍り

しが、説法いみじくせられし故に、龍神感應を垂れ雨影しう降りて、大地をうるほしかば、萬民飢饉のうれひをとどめて、安樂の思ひに住しけり。さてこそ其世の諺に、澄憲の説法には龍神感應を垂れ、甘露の雨を降らしけるとも申すなり。そのあした俊恵法師よみてつかはしける。

雲のうへに響くを聞けば君が名の雨とふりける音にぞありける
澄憲かへし、

あまてらす光の下にうれしくもありと我名のふりにけるかな

とうさん―登山
○平家物語の神
興振及び座主流
の條を見よ

又一とせ白山妙理權現の神興御とうさんありし時、山門の大衆蜂起して禁庭に嗾訴をいたすといへども、敢て御許容なかりけり。是によつて衆徒いきどほりをなして、八王子、客人、十禪師三社の神興を飾り奉り、禁庭に振り奉るべしと詮議するよし聞えしかば、君も臣も大きに騒ぎ給ひて、敕使をもつてなだめ給ひしかども、衆徒敢て宣旨をも用ひ奉らずして、既に西坂本をくだりて、さがり松たどすの邊まで神幸をなし奉りぬ。さる間武士に仰せて是を防がせらる。大衆神人事ともせずして、軍勢の中へ御興をかき入れ奉る程に、武士と大衆と互に矢先をそろへ挑み戦ふ程に、あるひは創を被り、あるひは矢

こうせん—廣宣
二乗はむじやう
—未詳
—うしんのやく
—増進の益に
て、成佛の因道
を増進する利益
の意か
きやうたう—行
道なるべし
多寶の塔中—多
寶塔の内にて

庭に打たれ、淺ましき事共なり。武士は多勢たぜいを入れかへく攻め戦へば、大衆遂に叶はずして、神輿をふりすて奉り、泣くく本山へぞ歸りける。夜に入て三社の神輿をば祇園の社へ入れ奉り給ひけり。御門大きに逆鱗げきりんましくて、則ち其時の天台座主明雲大僧正を流罪るざいの宣旨せんじ下されけり。大僧正はこんど御輿みこしふり奉りし事、衆徒のしわざなり、度々なだめ給ふといへども、用ひずしてかゝる大事に及べり、されば座主の御身には曇りなしといへども、救命なれば力なくして、追立おつての官使くわんしに具せられて、本坊を泣くく立出でて配所へ赴き給ふぞあはれなる。年比日比御身近う参りつかうまつりし人々あまた有りしかども、恐れをなして御供申す者もなかりしに、此澄憲僧都ばかりこそ御名残を惜み奉り、國分寺こくぶんじといふ所まで送り奉り給ひけり。座主澄憲を御前に召されて、汝われに名残を慕うて是まで來る志こそやさしけれ、その報恩に天台祕密の法文一心三觀の血脈けつぱくを付屬すと宣ひて、授け給ふこそ有難けれ。此法は是諸佛こしん己心の所生しよじやうなれば、如來四十年祕密して是を説き給はず。たまく一乗こうせんの時、二乗はむじやうの悟を開き、菩薩はそうしんのやくに預り給ふ。されば天台大師は大蘇山の法花三昧の道場にし、きやうたう修行せしときに、靈山りやうぜんの一會いちご現じつと、多寶たはうの塔中、釋尊よりこの法を

傳へ給ひ、又我朝の傳教大師もろこしに渡りて、台州臨海縣の龍興寺道邃和尚を師として仕へ給ひ、此法を傳受して歸朝し、我山を建立し、一心三觀の宗旨始め給ひけり。たやすからぬ祕法なりとぞ示し給ひける。この澄憲石山の觀音を信じて、常に參詣せられ、或時夜もすがら祈念せられけるに、觀音夢中に告げての給はく、そのかみ紫式部といひし女人當寺に參籠し、光源氏物語といふ草紙つくれり、其詞ゆふゑんにして心菩提を勧め、義理殊に深しといへども、いまだ供養をのべざる故に、善所に到ることなし、汝才智世にすぐれたり、速に供養をのべて彼の佛果を成すべしとぞ示し給ふ。澄憲驚き夢さめて寺中の僧衆に此由を告げ給へば、各奇異の思ひをなし、さらばとくく説法を始め供養を遂げ給へとありしかば、澄憲喜悅して、佛前に高座を構へ、既に源氏の供養を始め給ふ。此事四方に聞えしかば、京都より公卿殿上人官女以下の女房たちに至るまでさし集ひ給へば、道すがら馬車にせきあうて、人のゆききもたやすからず。其外大津、松本、志賀、唐崎、矢橋、草津の土民等、湖上に舟を浮べ、陸路に駒を早めて参り集ひける程に、石山寺の繁昌時を得たりと見えにけり。澄憲の説法は富婁那の辯舌に異ならざれば、信心微妙のことわり花を咲かせてのべ給ふ。その表白の詞に曰く、





あふひ一葵、逢
ふ日
じやうせつ
剝淨淨土
四智圓妙—大圓
鏡智、平等性智、
妙觀察智、成所
作智の四智圓備
して微妙なるを
いふ

そもく桐壺のゆふべの煙、速に法性の空に至り、箒木の夜の言の葉は終に覺樹の華を
開かん。空蟬の空しき世を厭ひて、夕顔の露の命を觀じ、若紫の雲のむかへを得て、末摘
花の臺に坐せしめん。紅葉の賀の秋のゆふべには落葉を望みて有爲を悲み、花の宴春のあ
したには飛花落葉を觀じて、無常を悟らん。たまく佛教にあふひなり、榊葉のさして
じやうせつを願ふべし。花散里に心をとどむといへども、愛別離苦のことわりを免るゝ
ためしなし、只須らくは生死流浪の須磨の浦を出で、四智圓妙の明石の浦にみを
つくし、關屋のゆきあふみちを遁れて、般若の淨きみぎりに赴き、蓬生のふるき草むら
を分けて、菩提の誠の道を尋ねん。何ぞ彌陀の尊容を寫して繪合にして、松風に業障の
薄雲を拂はざらん。生老病死の身、朝顔の日影を待たん程なり、老少不定の境、乙女子
が玉葛をかけても猶頼みがたし。谷たちいづる鶯の初音も何かめづらしからん、鳧雁
鴛鴦の囀りにはしかじ。籬にたはぶるゝ胡蝶只暫くの樂みなり。天人聖衆の遊びを思ひ
やれ、澤の螢のくゆる思ひ常夏なりといへども、忽ちに智恵の篝火にひきかへて、野分
の風に消ゆることなく、如來覺王の御幸にともなひて、慈悲忍辱の藤袴を著、上品蓮臺
に心をかけて、七寶莊嚴の楨柱のもとに到らん。梅が枝の匂ひに心をとどむる事なくし

つみ木―罪と積
みとにかく

善逝―佛十號の
一つ、好去と譯
す

て、淨土の藤の裏葉をもてあそぶべし。彼の仙洞千年の給侍には若菜を摘みて世尊の供養せしかば、成佛得道の因となりき。夏衣たちるにいかにしてか一枝の柏木をひろひて、妙法の薪となして、無始曠劫のつみ木を亡し、本有常住の風光を輝かして、聖衆音樂の横笛をきかん。うらめしきがなや、佛法の世に生れながら家を出で名をすつる砌には、鈴蟲の聲ふりすて難く、道に入り飾りをおろすところに、夕霧のむせび晴れ難し。悲しきかなや、人間に生れながら御法の道を知らずして苦海に沈み、幻の世を厭はずして世路を營まんこと。しかじ只薰大將の香を改めて青蓮の花ぶさに思ひを染め、匂ふ兵部卿のにはひを翻しては、香の煙のよそほひとなし、竹川の水をむすびては煩惱の身をすぎ、紅梅の色をかへしては愛著の心を失ふべし。待つ宵のふくるを歎きけん宇治の橋姫に至るまで、優婆塞が行ふ道をしるべにて、椎が本にとどまること勿れ。北邙の野邊の泡雪と消えんゆふべには解脱の總角を結び、東岱の山の早蕨の煙とのほらん朝には、栴檀のかげに宿木とならん。司位を東屋のうちに遁れて、樂み榮えを浮舟に譬ふべし。是も蜻蛉の身なり、有るか無きかの手習にも往生極樂の文を書くべし。かれも夢の浮橋の世なり、朝な夕なに來迎引接を願ひわたるべし。南無西方極樂彌陀善逝、願はくば狂言綺

六趣―地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上

つまこ―妻子か
慈眼視―原本
「慈眼現」とあり、
今改む

語の誤をひるがへして、紫式部が六趣苦患を救ひ給へ。南無當來導師彌勒慈尊、必ず轉法輪の縁として、是をもてあそばん人を安養淨刹に迎へ給ふこと豈疑ひあらんや。されば光源氏の名目みやうもく五十四帖に分てりといへども、大數たいすうの名は三十七卷くわんなり、これ大日の三十七尊を表せり。その卷々まきくに好色ゆふゑんのたはぶれ言を書き列ねたりといへども、又無上菩提の妙たみなる理ことわりを含めり。しかれば諸佛の御内證にも叶ひて佛果を成ぜしめんといへども、末代の衆生に千々ちぢの縁えんを結ばしめ、隨喜の功德をもつて、解脱の因となさしめんための方かた便べんにて、つまこの大會たいごを行はしめ、諸人しよじんの參詣さんぎをすゝむる也。誠に有難き御利生にて、慈眼視衆生の御誓願たのもしき御事也。

明曆四年仲夏上旬

藤井五兵衛